# 古今和歌集声点本の研究

秋永一枝

（目次）

第一部　古今和歌集声点本のアクセント
序章
第一篇　体言のアクセント（字音語を含む）
一　単純名詞のアクセント
二　派生名詞のアクセント
三　複合名詞のアクセント
四　固有名詞のアクセント





五　副詞・形容動詞その他の自立語のアクセント
六　字音語の声点
（以上「古今和歌集声点本の研究　研究篇上」1980・2刊行）
第二篇　用言のアクセント
七　形容詞のアクセント
八　動詞のアクセント
第三篇　付属語のアクセント
九　助詞のアクセント

563ページ

十　動詞のアクセント

第二部「古今和歌集声点本」の差声表示

十一　差声に関する諸問題

十二　差声と注釈と伝授と

十三　発音に関する諸問題

第三部「古今和歌集声点本」諸本とその消長

十四　声点本諸本とその関係

十五　差声伝授の流れ

一　以上「古今和歌集声点本研究　研究篇下」1991・1・25刊行予定

（以上59ページ（索引及び口絵写真を含む）校正刷ミ校・再校で生出）





付録

（一）古今和歌集声点本の研究　資料篇

表紙本二十一、奈良本六の声点注記資料

1972・3刊行、写真とも980ページ

（二）古今和歌集声点本の研究　索引篇

資料篇における資料の声点付語彙索引

1974・3刊行、437ページ

（三）永治二年本古今和歌集　声点注記資料

ならびに声点付語彙索引

1984・12刊行、写真とも58ページ

（概要）

声点注記は広い意味での注釈の一つである。古今集に、院政期から鎌倉期・室町期の差声がなされているところから、その語のアクセントや発音を推定することができる。

更にその語の複合や付属語の接続の様子も知ることができ、それによって品詞の認定にも役立ち得る。鎌倉期の文献では、終止形が連体形に吸収されていくのが、声点からも証明できる。音韻の面では、声点が単点か双点かで清濁の決定にも役立つ。（例えば「袖ひ





ずて」でなく「袖ひちて」であるなどし、解釈の面では「折りければ」と解したか、「居りければ」と解したか、なども、歌道流派の解釈を知ることができる。

語源の面では、助動詞「ず」と「ぬ」は別語源であろう、とか、「つみ石」は辞書にあるような「積み石」ではなく「詰み石」であろうなど、差声による推定が可能である。

伝授に関しては、声点の校合・移声など文字を媒介とした方法のほかに、聞書など音声を媒

今とした方法もあり、伝授者・伝受者の生育地などが関連することなどを述べた。

本論文では、第一部としてアクセント体系の解明と個別的なアクセントの推定を行なった。

第二部では、声点の認定や単語の確定の問題点を考察した。また懸詞の具体的発音や定義について考えた。更に差声と注釈と伝授の関係を定家本古今集・俊頼髄脳・寂蓮本古今集の比較によって考察してみた。ハ行転呼音や清濁など、発音に関するアクセント以外の問題点





についても若干の考察を行なった。

第三部では、声点本諸本の簡単な書誌と、差声に関する覚え書を記し、それら諸本の差声・移声などのように行なわれ、伝授されていたかを考えてみた。

付録の資料篇と索引篇は、右の基礎資料となるものである。

一九九〇年十月二十七日